

シンポジウム

- シンポジウム S1 2015 年度日本プランクトン学会春季シンポジウム
「Acartia 属カイアシ類の生物学」
- シンポジウム S2 「自国砕氷船を利用した極域海洋研究」
- シンポジウム S3 「光とプランクトン研究 ー現状と展望ー」
- シンポジウム S4 沿岸海洋シンポジウム
「沿岸海洋学における観測研究の最前線 」
- シンポジウム S5 「豊かな魚類生産を支える黒潮
ーその生物生産の仕組みと変動機構ー」
- シンポジウム S6 「海洋乱流測定技術の変遷 ー過去・現在・将来」
- シンポジウム S7 「温暖化適応策に対する海洋学の貢献」
- シンポジウム S8 「A-line モニタリングから海洋モニタリングの可能性を探る」

ナイトセッション

- ナイトセッション N1 「海洋若手研究交流会」
- ナイトセッション N2 「第 4 回 COSIA (海洋科学コミュニケーション実践講座)
体験ワークショップ」
- ナイトセッション N3 「南極における Sea Ice Biota 研究の進展を目指して」

シンポジウムS1

2015年日本プランクトン学会春季シンポジウム *Acartia* 属カイアシ類の生物学

共催：日本プランクトン学会、日本海洋学会

開催日：2015年3月21日（土）

場所：東京海洋大学品川キャンパス 講義棟3F32番教室

コンビナー：津田敦（東大）、上田拓史（高知大）

趣旨

Acartia 属カイアシ類は、主に汽水域から沿岸域に主に生息する、動物プランクトンとしては最もなじみ深い生き物である。沿岸域ではしばしば優占種となり生態系を支える鍵種の一つでもあろう。海に突き出た栈橋からプランクトンネットを曳けば簡単に採集でき、丈夫で、実験操作もしやすい。一方で、季節的休眠卵の生産、複数種による季節的棲み分け、汽水域から沖合にかけての水平的帯状分布、集群行動、地理分布と進化的背景など生態学的にも興味深い特徴を有している魅力的な研究対象でもある。また、「日本産海洋プランクトン検索図説」には15種が掲載されており、これは北米や欧州に比べると、日本近海が *Acartia* の宝庫であることを物語っている。本シンポジウムでは、身近で魅力的な生物である *Acartia* 属カイアシ類に関する既往の知見を取りまとめ、最新の研究を紹介することによって、沿岸生態系研究の方向性や魅力を議論する場としたい。

プログラム

9:30-9:35 開会挨拶 石丸隆（日本プランクトン学会会長）

9:35-9:50 趣旨説明 津田敦（東大）

Key notes

座長 津田敦（東大）

9:50-10:35 *Acartia* とはどんな生物か？

上田拓史（高知大）

10:35-11:20 *Acartia* 属の休眠卵

上真一（広島大）

一般発表

座長 山口篤（北大）

11:20-11:40 東京湾における *Acartia omorii* の長期変動

立花愛子（東大）・伊東宏（水土砂）、石丸隆（東京海洋大）

11:40-12:00 相模湾周辺域における *Acartia* 属カイアシ類の季節的消長と地域特異性

下出信次（横国大）・尾上保子（APEX）・山口貴史（横国大）・
菊池知彦（横国大）・戸田龍樹（創価大）

- 12:00-12:20 三陸沿岸域における *Acartia* 属カイアシ類の分布と季節的消長
西部裕一郎 (東大)・山田雄一郎 (北里大)
- 12:20-13:30 昼食
座長 下出信次 (横国大)
- 13:30-13:50 オホーツク海紋別港における沿岸性動物プランクトンの季節的消長と年変動
有馬大地 (北大)・浜岡荘司 (元紋別市)・
片倉靖次 (紋別市)・山口 篤 (北大)
- 13:50-14:10 日本沿岸域における *Acartia hudsonica* の地理分布と種内多様性
立花愛子・西部裕一郎・津田敦 (東大)
- 14:10-14:30 西日本の汽水性 *Acartia* 属カイアシ類の動物系統地理
大類穂子 (海洋研究開発機構)・ 上田拓史 (高知大)
- 14:30-14:50 休憩
座長 西部裕一郎 (東大)
- 14:50-15:10 餌料環境の変動に対する *Acartia steueri* の適応と応答
平原南萌 (創価大)
- 15:10-15:30 *Acartia clausi* コペポライト期における摂餌遊泳行動の発達
高橋一生 (東大)
- 15:30-15:50 *Acartia* 属カイアシ類の特殊な第一触角構造
戸田龍樹 (創価大)
- 総合討論 (座長 津田敦)
- 16:00-16:05 閉会挨拶
上田拓史 (高知大)

シンポジウム終了後、同会場において 2015 年度日本プランクトン学会総会を行います。また、総会終了後、日本プランクトン学会懇親会を予定しております。

シンポジウムS2

「自国砕氷船を利用した極域海洋研究」

開催日時：2015年3月21日（土）10:30～18:30

会場：東京海洋大学 講義棟 4階 42番講義室

主催：日本海洋学会、ブレイクスルー研究会

コンピナー：田村岳史（極地研）、渡邊英嗣（JAMSTEC）、溝端浩平（海洋大）、三瓶真（広島大）、山本正伸（北大）

趣旨：

現在、極域海洋は「急激に変わりゆく北極海」、「確実に変わりゆく南極海」と、近年にたく注目されている。両極域では、GRENE、JAREといった大型研究プロジェクトが遂行され、日本の極域研究への注目度はかつてない高まりを見せている。今後の極域研究において、海氷域の調査研究が重要になる事は疑いない。海氷域の研究には学術砕氷船が必要不可欠であるが、独自の学術砕氷船を持たない事が我が国の極域海洋研究推進上、大きなネックになっているとの意見があり、将来の研究の方向性を考える上で避けて通れない検討課題となっている。このような状況の中で、砕氷船を使用するとできる事、さらに自国で砕氷船を持つとできるようになる事を整理し、検討する必要があると考えられる。

本シンポジウムでは、両極の海洋研究者による学術砕氷船を用いた研究の紹介をベースに、学術砕氷船の必要性和極域海洋研究におけるインパクトについて議論し、学術砕氷船の導入が研究推進のための突破口になりうるかについて討論する。さらに、建造後を想定した砕氷船運用計画と、そのベースとなる研究・観測プランについても議論を行い、独自の学術砕氷船があった場合に、国際的運用も含めてどのように活用されるのかについても議論を行う。講演者は、学術砕氷船があれば今までできなかったこんな事ができて、このようなサイエンスに貢献する事ができるのだという将来プランを紹介する。さらに、他研究分野との融合という形での、砕氷船の有効利用を目指した議論も行う。本シンポジウムを、学術砕氷船を活用する事の重要性について、海洋学会員の理解を得る為の第一歩としたい。

一方で、最近では学術砕氷船の建造に関する検討が行われ始めている。砕氷船の建造に関しては、現在極域研究を行っている研究者だけではなく、海洋学コミュニティ全体で受け止めて議論する必要があると考えられる。将来の砕氷船の利用は極域の海に留まらず、地球規模のあらゆる自然科学に利用し展開できる可能性もある。海洋学コミュニティ全体で砕氷船の位置付けを認識するためにも、海洋学会に参加される多くの方に、本シンポジウムにご参加を頂きたい。

プログラム

第一部：10:30～12:30（座長：溝端浩平）

- ・「趣旨説明」：田村岳史（極地研）
- ・「学術砕氷船によって広がる極域海洋地質学の進展」：池原実（高知大）
- ・「北極海における古環境研究の現状」：山本正伸（北大環境科学）
- ・「地球化学で挑む極域海洋研究」：渡邊豊（北大環境科学）
- ・「北極域の固体地球科学：分かっていること知りたいこと」：佐藤暢（専修大）
- ・「極域海洋の地球物理観測が明らかにする海洋底拡大の初期プロセス」：佐藤太一（産総研）

（昼食：12:30～13:30）

第二部：13:30～15:10（座長：渡邊英嗣）

- ・「極域予測研究のための高層気象観測」：猪上淳（極地研）
- ・「北極圏において海洋低次生態研究を行う意義」：三瓶真（広島大）
- ・「北極海における海水変動のメカニズム解明に向けた大気-海氷-海洋間の熱収支観測」：溝端浩平（海洋大）
- ・「北極海における砕氷船を用いた海洋生物研究」：松野孝平（北大水産）
- ・「海水予測のためのモデルと観測」：小野純（JAMSTEC）

（休憩：15:10～15:30）

第三部：15:30～17:10（座長：三瓶真）

- ・「南極沿岸海洋における日本の物理観測の近未来」：青木茂（北大低温研）
- ・「砕氷船を活用した大気・エアロゾル観測案」：原圭一郎（福岡大）
- ・「氷の下の鉛直混合と全球子午面循環の関係」：勝又勝郎（JAMSTEC）
- ・「南極海氷域に生きるプランクトンとその変動」：飯田高大（極地研）
- ・「砕氷船を用いた冬季沿岸ポリニヤ観測」：平野大輔（極地研）

（休憩：17:10～17:30）

第四部：17:30～18:30（座長：田村岳史）

- ・「砕氷船建造に向けての動き」：北川弘光（海洋政策研究財団）
- ・総合討論

シンポジウムS3

光とプランクトン研究 -現状と展望-

日時：3月21日(土) 10:00 - 17:30

会場：東京海洋大学 31 番講義室

コンピナー：齊藤宏明(東大大気海洋研)、戸田龍樹(創価大工)

趣旨

光がプランクトンにどのように利用され、生理や行動様式にどのような影響を及ぼすかは、生物地球化学循環や食物網動態研究において基盤となる知見である。そのため光とプランクトンに関し、沿岸域から外洋域、極域から熱帯域において様々な研究が行われてきた。得られた知見は、人工衛星や光学機器による海洋生態系構造や生産過程のリモートセンシング技術の開発に用いられ、赤潮の発生機構の理解に基づく制御手法の開発や、プランクトンを用いた有用物質生産のための大量培養技術など、プランクトン研究による人間社会への貢献にも繋がってきた。本シンポジウムでは、光とプランクトンをテーマに、各分野でのこれまでの研究の成果を紹介するとともに、残された課題と研究の展望について議論する。

プログラム

10:00 - 10:10 主旨説明 戸田龍樹(創価大工)

10:10 - 10:35 細菌プランクトンの動態と光栄養 浜崎恒二(東大大気海洋研)

10:35 - 11:00 浮遊性原生動物と藻類の光共生 藤木徹一(JAMSTEC)

11:00 - 11:25 Ultraviolet radiation attenuation and biological factors in tropical coastal waters 水林啓子、Kuwahara, Victor(創価大工)

11:25 - 11:50 光と動物プランクトン 高橋一生(東大院農学生命)

11:50 - 12:50 休憩

12:50 - 13:15 クロロフィル蛍光法のゆくえ 田口哲(創価大学)

13:15 - 13:40 クロロフィル蛍光によるアイスアルジーの光保護機構の解明 片山智代(創価大)

13:40 - 14:05 自己遮蔽が春季ブルームの終焉と生元素循環へ与える影響 齊藤宏明(東大大気海洋研)

14:05 - 14:30 Monitoring harmful algal blooms and environmental stress in Singapore coastal water Sandric Leong(シンガポール大学)

14:30 - 14:55 Development of harmful algal blooms integrated observing system in the Gulf of Mexico 古原慎一(テキサスA&M大学)

14:55 - 15:10 休憩

15:10 - 15:35 海色リモートセンシングの現状と課題 笹岡晃征(JAMSTEC)

- 15:35 - 16:00 植物プランクトン培養事業による震災復興の光 佐々木洋 (石巻専修大)
- 16:00 - 16:25 海洋植物プランクトンのバイオ燃料創出に向けたメタボローム解析
大井信明 (日本気象協会)・白岩義博(筑波大学生命環境系)
- 16:25 - 16:50 藻類大量培養技術の現状と未来 長尾宣夫 (マレーシアプトラ大学)
- 16:50 - 17:30 総合討論 齊藤宏明 (東大大気海洋研)

シンポジウムS4

沿岸海洋研究シンポジウム

沿岸海洋学における観測研究の最前線 I

主催：日本海洋学会沿岸海洋研究会

コンピナー：磯辺 篤彦(九大応力研)・吉江 直樹(愛媛大沿岸センター)

日時：2015年3月21日 9:40 ~ 19:00

場所：東京海洋大学品川キャンパス 白鷹館 1F

会長挨拶(9:40~9:50)：門谷 茂(北大院環境)

趣旨説明(9:50~10:00)：磯辺 篤彦(九大応力研)

第一部 観測研究の最前線

座長：磯辺篤彦(九大応力研)

1. 船舶曳航式バルーンを用いた沿岸海洋観測の提案
(10:00-10:30) 宮尾泰幸(九大総理工)・磯辺篤彦(九大応力研)
 2. 水中グライダーによる沿岸海洋観測の可能性
(10:30-11:00) 伊藤進一(東大大海研)・有馬正和(大阪府大)・市川雅明(IHI)・青木茂(北大低温研)・安田一郎(東大大海研)・笈茂穂・長谷川大介・和川拓(水研七東北水研)・黒田寛(水研七北水研)・清水勇吾(水研七中央水研)
 3. 乱流微細構造の計測で見た沿岸の物理過程 -有明海における研究例から-
(11:00-11:30) 堤英輔(愛媛大沿岸センター)・松野健(九大応力研)
- 休憩 (11:30-13:00) -
 4. 海洋レーダの研究開発と取り巻く状況
(13:00-13:30) 藤井智史(琉球大)
 5. 漁船を利用した海況モニタリング
(13:30-14:00) 渡慶次力(宮崎水試)・清水学(水研七中央水研)・市川忠史(水産庁)・広瀬直毅・千手智晴(九大応力研)
 6. 沿岸域におけるプランクトン生態のモニタリング手法の開発
(14:00-14:30) 山崎秀勝・増永英治・H. Foloni-Neto・近藤逸人・S. Gallager(東京海洋大) * (休憩後に時間変更の可能性あり)
- 休憩 (14:30-14:45) -
- 座長：吉江直樹(愛媛大沿岸センター)
7. 計量科学魚探による海洋生物のモニタリング
(14:45-15:15) 吉江直樹(愛媛大沿岸センター)

8. バイオロギングによる海洋生物のモニタリング

(15:15-15:45) 宮下和士(北大北方生物圏フィールド科学センター)

9. 環境 DNA を用いた魚類モニタリング

(15:45-16:15) 源利文(神戸大人間発達環境学研究科)・近藤倫生(龍谷大理工)・笠井亮秀(京大フィールド研)

まとめの討論 (16:15-16:30) 座長：磯辺：吉江

- 休憩 (16:30-17:00) -

第二部 海洋観測機器メーカーとの対話 (17:00-19:00)

座長：磯辺篤彦(九大応力研)

1. メーカーからの話題提供(これからの製品開発方針などを自由に)

海洋観測機器開発メーカーの皆様

2. 研究者からの話題提供(開発への要望などを自由に)

田中潔・伊藤幸彦(東大大気海洋研), 吉江直樹(愛媛大沿岸センター)

シンポジウムS5

2015年度水産海洋シンポジウム

豊かな魚類生産を支える黒潮 - その生物生産の仕組みと変動機構 -

日時：2015年3月21日（土）9:30～16:20

場所：東京海洋大学

共催：水産海洋学会、日本海洋学会

コンピーナー：高橋素光（水研セ西海区水研）・齊藤宏明（東大大海研）・山田陽巳（水研セ西海区水研）

挨拶：和田時夫（水産海洋学会会長）

9:30-9:35

趣旨説明：高橋素光（水研セ西海水研）

9:35-9:40

座長 山田陽巳

1. 海洋生態系間比較から見る黒潮海流域における小型浮魚類の資源量変動と生物特性
高須賀明典（水研セ中央水研）・大関芳沖（水研セ東北水研）・黒田寛（水研セ北水研）・
奥西武（水研セ東北水研）

9:40-10:05

2. 餌環境がマアジの成長・生残過程に与える影響

10:05-10:30

高橋素光・佐々千由紀（水研セ西海水研）・西内耕（水研セ）・塚本洋一（水研セ北水
研）

3. 中深層性魚類マイクロネクトンの構造と表層生態系への影響

10:30-10:55

佐々千由紀（水研セ西海水研）

4. 黒潮域におけるEcopath構築の試み

10:55-11:20

巨真吾（水研セ中央水研）・村瀬弘人（水研セ国際水研）

昼休み（水産海洋学会幹事会）

11:20-12:30

座長 平田貴文

5. 黒潮の栄養塩輸送及びその東シナ海の基礎生産に与える影響

12:30-12:55

郭新宇・王玉成（愛媛大沿岸セ）・趙亮（天津科技大）

6. 東アジア縁辺海の河川栄養塩供給変化に対する低次生態系の応答

12:55-13:20

高山勝巳・広瀬直毅（九大応力研）・鬼塚剛（水研セ瀬戸内水研）

7. 黒潮フロント域の栄養塩供給機構

13:20-13:45

長井健容（海洋大）

休憩

13:45-14:05

座長 岡崎雄二

8. 衛星から見る黒潮域の植物プランクトン群集別一次生産速度

14:05-14:30

平田貴文（北海道大学）

9. 黒潮域における浮遊性カイアシ類の種多様性と群集構造

14:30-14:55

宮本洋臣（水研セ東北水研）

10. 安定同位体比を用いた食物網解析

14:55-15:20

富樫博幸（水研セ東北水研）

11. 黒潮域における物理環境とイワシ類仔稚魚の輸送・成長特性 15:20-15:45
伊藤幸彦(東大大海研)・西川悠(JAMSTEC-CEIST)・小松幸生(東大新領域/大海研)・
安田一郎(東大大海研)

司会 高橋素光

総合討論 15:45-16:15
閉会：山田陽巳(水研セ西海区水研) 16:15-16:20
水産海洋学会賞授与式、2015年度水産海洋学会総会 16:30-18:00

開催趣旨：

黒潮が日本列島に沿って流れることにより形成される多様な物理環境は、我が国周辺の豊かな魚類生産を育む重要な要因である。黒潮域は、親潮域と比べれば生物生産は低いものの、多くの魚種が産卵場や成育場として利用している。それは、減耗の激しい生活史初期に黒潮域の高水温環境でより速く成長することが、生残に有利に働くためである。しかし、貧栄養の亜熱帯水が輸送されるにも関わらず産卵場や成育場が形成される理由や、黒潮の流量や流軸変化に伴う物理環境変動に対する生態系の応答には、不明な点が多い。

黒潮域とその周辺海域における生態系の構造と機能を理解することは、親潮域や日本海も含めた日本周辺海域における魚類資源の来遊や加入量変動要因を解明する鍵となる。本シンポジウムでは、黒潮とその周辺海域において、海洋物理環境変動に対する生態系の応答機構を把握し、黒潮が日本の豊かな魚類生産を支える仕組みを明らかにすることを目的とする。

シンポジウムS6

海洋乱流測定技術の変遷 — 過去・現在・将来

コンピーナー：

山崎秀勝（東京海洋大学）

日比谷紀之（東京大学）

松野健（九州大学）

趣旨

海洋乱流の計測技術は 1950 年代に Stewart を中心とするカナダのチームにより Kolmogorov -5/3 則を検証することに端を発し、その後 Scripps Institution of Oceanography で Ph.D. を所得した Osborn が University of British Columbia に移籍し shear probe を開発することで目覚ましい発展をとげた。ほぼ時を同時に Neil Oakey も独自の shear probe を開発している。しかしながら 90 年代まではこの技術を伝承していく研究組織は限定的であった。北米においてこの技術は Osborn, Oakey, Gregg, Lueck 及び Moum の率いる研究グループに限定されていた、またこの技術を市販化することにも試みられなかった。現在、Osborn, Oakey 及び Gregg はすでに引退しており北米でこの技術を伝承する研究グループは著しく減少している。1990 年代の半ば、山崎は Lueck とアレック電子（現 JFE アドバンック）と共同で市販化を視野にいたした TurboMAP の開発に成功した。現在は、Lueck が設立した Rockland Scientific の VMP が国際市場で流通している。

本シンポジウムの趣旨は、海洋乱流の計測技術の歴史を振り返ると共に、海洋乱流計測装置の市販化により拡大している日本の研究者層の現在の活動を紹介する。さらに、今後の海洋乱流計測技術の将来展望について議論を展開する。

過去

「海洋乱流計測技術の発展史」 山崎秀勝 10:00-10:30

現在

「VMP-5500 を用いた深海乱流の観測的研究」 日比谷紀之 10:30-11:00

「陸棚域および沿岸域での計測」 松野 健 11:00-11:30

「南極の観測」 北出裕二郎 11:30-12:00

「低予算・少人員の乱流観測」 伊藤幸彦 13:00-13:30

「YODA Profiler を用いた沿岸海域における観測」
増永英治 13:30-14:00

休憩

14:00-14:30

将来

「AUV を用いた観測」 近藤逸人 14:30-15:00

「TurboMAP-Glider を用いた観測」 Herminio Folo 15:00-15:30

「黒潮流軸に沿ったフロートによる乱流計測」
長井健容 15:30-16:00

「Deep sea turbulence measurement by XMP」 Hua Li 16:00-16:30

「Optical Turbulence Probe」 Darek Bogucki 16:30-17:00

総合討論

17:00-18:00

今後の発展はどうあるべきか？

シンポジウムS7

温暖化適応策に対する海洋学の貢献

主催：日本海洋学会海洋環境問題研究会

コンピナー：河宮未知生（海洋研究開発機構）、小埜恒夫（中央水産研究所）、
建部洋晶（海洋研究開発機構）

日時：2015年3月25日(水) 午前9:30 - 15:30

会場：東京海洋大学品川キャンパス 講義棟22番教室

開催趣旨：

全球的な気候変動はもとより、我が国における異常気象頻度の増加、水資源及び植生の変化、周辺海域における水産資源変動など、地球温暖化の影響は多岐にわたり顕在化しつつあるという認識が広まっており、国を挙げての対応が急がれている。環境省では、2015年度夏の閣議決定を目指し温暖化適応策の策定を進めており、そのための科学的基盤として、専門家からなる複数のワーキンググループを設置し、農林水産業や水資源など関連分野における影響評価のとりまとめを行っている。本シンポジウムでは、ワーキンググループがとりまとめた内容のうち特に海洋に関連の深い部分について紹介し、海洋学分野における今後の影響評価研究の方向性について議論する。また、海洋学分野に従事する研究者と一般社会との相補的な関係を構築する前提において、適応策の立案に対し海洋学からどういった貢献ができるか、またすべきかを問う機会としたい。

9:30-10:00 趣旨説明、および温暖化予測データの利用について

河宮 未知生（海洋研究開発機構）

10:00-10:30 IPCC 第5次評価報告書の観測海洋における理解の進展

青木 茂（北海道大学低温科学研究所）

10:30 -11:00 環境省の気候変動影響評価等小委員会で進む検討について

野尻 幸宏（国立環境研究所）

11:30-13:00 休憩

13:00 -13:30 農林水産業分野における海洋学の貢献

木所 英昭（水産総合研究センター日本海区水産研究所）

13:30-14:00 自然生態系分野における海洋学の貢献

小埜 恒夫（水産総合研究センター中央水産研究所）

14:00-14:30 地球温暖化・海洋酸性化が沿岸生態系に及ぼす影響評価・予測

藤井 賢彦（北海道大学大学院地球環境科学研究院）

14:30-15:00 地球温暖化による大型海産植物の分布変化予測

小松 輝久（東京大学大気海洋研究所）

15:00-15:30 総合討論

司会：小埜 恒夫（水産総合センター）、河宮 未知生（海洋研究開発機構）

シンポジウムS8

「A-line モニタリングから海洋モニタリングの可能性を探る」

主催：日本海洋学会

コンビナー：桑田 晃（水研セ東北水研）、葛西広海（水研セ北水研）

日時：2015年3月25日（水）9:30-18:00

場所：東京海洋大学 講義棟3F 32番教室

趣旨：

北海道から東北沖の水域は、高い生産性の海洋生態系を有する親潮、黒潮親潮移行域に位置し、世界的に有数の好漁場となっている。1987年に北海道区水産研究所は、この海域の海洋環境の季節変動の継続的なモニタリングを目的として、厚岸を起点とする観測定線：Aラインを設置し、定線観測によるモニタリングを開始した。その後、2002年に東北区水産研究所との共同体制となり、四半世紀以上にわたる継続的な海洋観測により多分野にわたり多くの成果を上げてきた。昨年、A-lineモニタリングは、これまでの実績が評価され、POMA (PICES Ocean Monitoring Service Award) 2013を受賞した。この受賞を契機とし、本シンポジウムでは、Aラインモニタリングにより得られた最近の成果を俯瞰し、親潮、黒潮親潮移行域の生態系における物理・化学環境・植物・動物プランクトン群集・魚類・生態系モデル・安定同位体による食物網解析の知見を総括するとともに、今後の海洋モニタリングの可能性を探る機会としたい。

プログラム

9:30-9:40 シンポジウム趣旨説明

桑田 晃（東北水研）

9:40-10:00 「A - ライン観測黎明期の取りまとめ」

津田 敦（東大大気海洋研）

物理過程

10:00-10:20 「A-lineモニタリングの海洋物理学的な重要性と出現水塊の長期変化」

清水勇吾・日下 彰（水研セ中央水研）、黒田 寛（水研セ北水研）、奥西 武・筧 茂穂・長谷川大介・和川 拓・大野創介（水研セ東北水研）、伊藤進一（東大大気海洋研）

10:20-10:40 「Aライン調査に基づく20年規模の親潮弱化トレンド」

黒田 寛(水研セ北水研)、和川 拓(水研セ東北水研)、清水勇吾・日下 彰(水研セ中央水研)、伊藤進一(東大大気海洋研)奥西 武・笥 茂穂・大野創介・長谷川大介(水研セ東北水研)

10:40-11:00 「沿岸親潮域の海洋環境の季節/経年変動」

日下 彰・清水勇吾(水研セ中央水研)

化学環境

11:00-11:20 「親潮域における主要栄養塩と鉄の動態観測」

小埜恒夫(水研セ中央水研)、西岡純(北大低温研)

11:20-11:40 「親潮域における微量ガス交換と生物生産」

渡辺 豊(北大地球環境)

バクテリア

11:40-12:00 「親潮域・黒潮親潮移行域におけるバクテリア群集構造の季節間比較」

片岡剛文(国環研)

12:00-13:00 昼休み

植物プランクトン

13:00-13:20 「親潮域・黒潮親潮移行域における植物プランクトン群集の基礎生産と群集構造」

桑田 晃(水研セ東北水研)

13:20-13:40 「A-lineにおける珪藻類の群集構造の季節変動および経年変動」

渡辺 剛(水研セ東北水研)

13:40-14:00 「A-lineにおけるピコ植物プランクトン群集構造の季節変動と経年変動および今後の展望」

谷内由貴子(水研セ東北水研)

14:00-14:20 「A-lineにおける海洋ピコ植物プランクトンパルマ藻群集の季節変動」

一宮睦雄(熊本県大)、清水勇吾(水研セ中央水研)、桑田 晃(水研セ東北水研)

動物プランクトン

14:20-14:40 「親潮域カイアシ類群集の摂餌圧」

高橋一生（東大農）

14:40-15:00 「親潮域における*Neocalanus*属カイアシ類3種の初期生活史」

藤岡秀文（東大大気海洋研）

15:00-15:10 休憩

15:10-15:30 「A-lineにおけるオキアミ類研究の成果と今後の展望」

岡崎雄二（水研セ東北水研）

15:30-15:50 「A-lineにおけるメソ動物プランクトンの時空間変動」

田所和明（水研セ東北水研）

魚類

15:50-16:10 「サンマの摂餌、成長、産卵とエネルギー収支」

栗田 豊（水研セ東北水研）

生態系モデル

16:10-16:30 「親潮・移行域における海洋低次生態系モデルの展開」

吉江直樹（愛媛大）

16:30-16:50 「魚類成長モデルによる水産海洋研究の取り組み」

奥西 武（水研セ東北水研）

休憩

16:50-17:00

安定同位体による食物網解析

17:00-17:30 「A-line の観測（2009年）の観測が起点となった「新食物連鎖解析法」とその次世代モニタリングシステム構築への提言」

和田英太郎（水研セ中央水研, JAMSTEC）・野口真希(JAMSTEC)

17:30-18:00 総合討論

葛西広海（水研セ北水研）、桑田 晃（水研セ東北水研）

ナイトセッションN1

海洋若手研究交流会

日 時：2015年3月22日(日) 18:00 - 20:00

場 所：東京海洋大学 講義棟 21 番教室 (休憩室)

主 催：海洋若手研究者の会、日本海洋学会

コンビーナー：和田 茂樹(筑波大)、中嶋亮太(JAMSTEC)、山口創一(九州大学)、福田美保(放射線医学総合研究所)、浦川昇吾(気象研究所)

開催趣旨

海洋に関わる諸問題は年々多様化しており、物理、化学、生物といった様々な分野、視点から取り組むことが不可欠である。特に、これからの海洋学会を担う若手研究者の柔軟な発想を活かし、異分野の垣根を越えた議論や研究提案が不可欠である。

このような中で、植松前会長が提唱した6本の矢の2本目に据えた若手研究者への支援を受け、2013年に設立された海洋若手研究者の会は、海洋学会の開催に合わせたナイトセッション等を行ってきた。今回の海洋学会においては、2014年9月の秋季海洋学会で作上げた共同研究グループの進展の報告と、新たな共同研究取り組みの可能性について議論の場を提供することを目的とする。

プログラム：

18:00~18:10 趣旨説明 和田茂樹

18:10~18:25 秋季海洋学会で提案された共同研究案の進捗状況報告

総合司会：山口創一、福田美保

18:25~19:45 若手研究者による分野横断的共同研究に関するパネルディスカッション

総合司会：和田茂樹、中嶋亮太

- 分野横断的共同研究を行っている研究者に、話題提供を行っていただきます(30分程度)
- 数人の若手研究者に研究の紹介を行っていただきます(30分程度)
- 上記の発表者をパネラーとして、共同研究を実施する上での工夫や、各発表者の研究に対して具体的に協力できそうな点について、聴衆を交えた意見交換を行います(20分程度)

19:45~19:55 若手研究者のキャリア形成に関する話題提供

司会 中嶋亮太、浦川昇吾

19:55~20:00 今後の活動とアンケート 和田茂樹

* 必要に応じて、各自で軽食をご用意ください。

* ナイトセッション終了後に、周辺で懇親会を行います。奮ってご参加ください。

ナイトセッションN2

第4回 COSIA (海洋科学コミュニケーション実践講座) 体験ワークショップ —学習者の多様性に配慮した学習環境をつくる—

主催：日本海洋学会教育問題研究会、NPO法人海の自然史研究所

日時：3月24日(火) 16:30～18:00

場所：東京海洋大学品川キャンパス講義棟3階31番講義室

定員：20名(事前登録制。定員に満たない場合には当日受付あり)。

詳細と事前登録は、以下の教育問題研究会ウェブサイトを参照

<http://www.jos-edu.com/COSIA.html>

趣 旨

2012年度秋季大会に開催したシンポジウム「海洋の知識を社会に伝える科学コミュニケーションスキル」に関連した事業として、2013年度春季大会、2013年度秋季大会、2014年度春季大会に引き続き、海洋学会員に、相手が能動的に学べる海洋学習の場をつくる技能を身につける講座であるCOSIA(海洋科学コミュニケーション実践講座、全10回)の一部を体験する場を提供する。特に大学院学生、若手研究者、若手大学教員の参加を歓迎する。

プログラム

16:30 - 16:35 趣旨説明 市川洋(海洋研究開発機構)

16:35 - 17:55 学習者の多様性に配慮した学習環境をつくる

講師：都築章子(海の自然史研究所)、今宮則子(海の自然史研究所)

17:55 - 18:00 閉会挨拶 今宮則子(海の自然史研究所)

概 要

人種・言語・文化・国籍・ジェンダーなどが異なる学習参加者のすべてが、その違いにかかわらず質の高い学習指導を受けられる方法を開発する取り組みを「インクルージョン(包括)」と呼ぶ。海洋科学の指導や教育に携わる人々が、多様な人々に質の高い海洋科学教育を提供する海洋科学コミュニケーション活動の計画立案やプログラム開発をおこなう際には、学習者の多様性や平等を配慮した学習環境をつくることが不可欠である。今回の体験ワークショップでは、学習環境の多様性と学習者が得る満足度に及ぼす海洋科学の指導や教育に携わる人々のふるまいの影響の各々を掘り下げ、海洋科学コミュニケーションの場で人々に疎外感を覚えさせるさまざまな要素・要因について検討し、学習者の各々が受け入れ、一体感を感じることを可能とするための方法について考える。

<参考>

3月21日(土)10時より「ヴァージンカフェ品川」で「第15回海のサイエンスカフェ」を開催します。

詳細は <http://www.jos-edu.com/SciCafe/> をご覧ください。

ナイトセッションN3

「南極海におけるSea Ice Biota研究の進展を目指して」

コンピーナー：谷村篤(極地研究所・総研大)・茂木正人(東京海洋大学・極地研究所)・
小達恒夫(極地研究所・総研大)

(開催責任者：谷村篤、042-512-0735、tanimura.atsushi@nipr.ac.jp)

開催日時：2015年3月24日(火) 16:30～18:30

会 場：東京海洋大学 講義棟3階33番教室

趣旨：極域海洋の大きな特徴は海氷の存在である。年々の海氷の形成と消失の過程は、大気と海洋の熱やガス交換への影響、深層水の形成過程への影響等々、世界の気候を支配する極めて重要な役割を果たしていることはよく理解されている。一方で、海氷中には海氷特有の微小な生物群集 (Sea Ice Biota) が存在し、極域海洋生態系の物質循環の経路の一つとなっているが、その生物学的・生態学的な意義や役割についてはまだあまりわかっていない。南極海においては、沿岸定着氷域の研究に比べ、浮氷域での研究は十分ではない。とりわけ、浮氷そのものが生物学、生態学的観点からの研究の対象として取り上げられることはなかった。しかしながら、我々が最近始めた南極海における海氷採集・生物組成調査から、浮氷中にも豊かな微小生物相があることが分かってきた。そこで、本ナイトセッションでは、断片的なデータであるがこれまでに浮氷域で得られた海氷中の微小生物に関する成果を発表するとともに、その生理・生態学的意義、定着氷の生物群集との関係、さらには海氷履歴の指標生物としての役割の可能性等について議論する。

プログラム

1．話題提供

- 1) 趣旨説明
- 2) 海氷はどこで生まれてどこで融けるのか：木村詞明(極地研/東大)
- 3) 海氷の中の微細藻類群集について：宮崎奈穂(東京海洋大学)
- 4) 海氷の中の動物群集について：谷村 篤(極地研)
- 5) 海氷融解に伴う微小動物の放出：小島本葉(総研大)
- 6) 海氷起源の微小生物に始まる食物連鎖について：茂木正人(東京海洋大学)

2．総合討論